

3年ぶりに2種委員会（高体連サッカー部）から派遣され、第92回高校サッカー選手権を視察する機会を頂いた。

まず視察した試合は以下の5試合（勝ちチームが左）。

- | | | | |
|--------------|----------|----|--------------|
| (1)12月30日開幕戦 | 熊本国府（熊本） | VS | 國學院久我山（東京 B） |
| (2)12月31日一回戦 | 佐賀東（佐賀） | VS | 東海学園（鹿児島） |
| (3) | 東福岡（福岡） | VS | 米沢中央（山形） |
| (4)1月3日三回戦 | 富山第一（富山） | VS | 市立浦和（埼玉） |
| (5) | 日章学園（宮崎） | VS | 東福岡（福岡） |

この5試合に共通する特徴をあげるのは難しい。(1)(2)(5)は、ポゼッション型の相手と対戦するチームが意図的に守備ラインを下げブロックを作り、ポゼッション率の争いを放棄しつつカウンターを狙うことで勝利を手繰り寄せた。特に、(5)日章学園は、自由自在の攻撃力を誇り優勝候補筆頭の一角であった東福岡を堅守の末PK合戦で破ったが、その主将が「ポゼッションには自信があります」（『大会公式プログラム』p.75）と語っていただけに、余計に守備ラインを下げた守備的戦いが印象的であった。(1)は、2年前（90回大会）にて奔放なパスワークとドリブルで大きなインパクトを残し今回も圧倒的な中盤構成力で優勝候補に挙げられていた國學院久我山に対して、自嘲気味に「国府バエ」と呼ぶしつつこい守備で熊本国府が相手の攻撃を最少失点に抑え、カウンターから（本当に単発のカウンターから）二度ネットを揺らし勝利する、といった戦いであり、スキルの差が得点差に全くつながらなかった戦いとして印象深かった。

近年、選手権において優勝候補が早々と敗れる「波乱」や実力差の予想される対戦において「伏兵」が健闘することが多いが、そしてその傾向の原因を地域格差が是正されてきている点¹や、リーグ戦と選手権の戦い方の変化への対応が難しい点²に求める分析がまま見られるが、私見では、近年の《守備的にゲームをコントロールする戦術の浸透》が最大の要因のように思われる。かなり以前から、DFの枚数を増やしたり、相手中心選手にマンマークをつける戦術はあったが、ラインの高さの調整や守備における限定の精緻化（外へのワンサイドカットでなくなった）によって《ボールの取り所の明確化》がはかられてきたという戦術上の進化が、「波乱」の最大の要因ではないだろうか。

攻めているチームがゴールをこじ開けられず、守っているチームが一発でゲームをものにする、というサッカーでまあある展開は、一発勝負のトーナメント戦だけに選手権で余計に起こり易いとは言える。ただ、そうした一般論や上記の守備側チームの要因、大会規定（前後半80分の即PK合戦という大会規定）に触れるだけではなく、ポゼッション型の

¹ プリンスリーグ等の広域交流戦の定着など何らかの理由により。

² リーグ戦にてJユース相手に守備的に戦ってきたチームが選手権では相手にそれをしてやられ、不慣れな戦いを強いられるなどの感想は、東北地区からプレミアリーグに参加しているチームなどから聞こえてくる話である。特に、プレミアリーグの日程が12月にも及ぶため、リーグ戦の戦いから選手権用の戦いへとチームをアレンジさせるには日程的に苦しいようだ。

チーム自身の中に課題を見出す必要もあろう。以下では、二つの課題を挙げておく。

第一に、前を向ける状況で前を向かず横や後方へのトラップ・パスを選択し攻撃を自ら遅らせるプレーの多さである。(1)國學院久我山、(2)東海学園の攻撃に顕著だったが、ポゼッションにこだわるあまりか、特にバックパスへの過度な依存が見受けられた。その理由として、①後方よりボールを受ける選手が自分の背後を把握する良いボディ・シェイプを作ることができないため（背後を観れていないため）、②相手を背負っている苦しい状況や前方にパスコースが少ない苦しい状況をリセットするため、③前を向いており自分よりも良いボディ・シェイプをしている味方を使い攻撃を加速させるため、④前方へのボールの進行を意図的に遅らせゲームに落ち着きを与えるため、以上四点考えられるが、②は措くとして、③④特に④を口実にしつつ実の理由は①ということになってやいないか。チームの攻撃が全体的に急ぎすぎているのであれば、前を向いた状態でもスローダウンできる訳で、というか、ボール保持者が横や後ろを向けば向くほど相手の寄せを招き急がねばならない状況となることを考えると、前を向いた状態を高い位置でより多く維持するチームが実は有効にゲーム展開をスローダウンできるはずである。縦への意識がしっかりあるチームが逆説的に遅攻もできると言い換えても良い。前を向ける状況でしっかりと前を向く状況判断（というかボールを受ける際の良いボディ・シェイプ）に対する意識の欠如が、「攻めあぐみ」を生んでいた。

もちろんこのようにまとめると、バックパスを多用しつつ破壊的な攻撃力を誇るバルサを反例として挙げる意見が想定されるが、例えば中心選手シャビは、バックパスをした後にわずかでも動き直して良いボディ・シェイプを作り、前方を確認し、アイディアをもってリターンパスを受ける準備を怠らない。シャビ程の選手であっても毎回前方へのしっかりとした観察ができていないわけでもない。後方へのリターンパスに頼るには頼るが、それは次の攻撃のための時間稼ぎであり、攻撃を早めるためのバックパス、または、次に前方にボールを運ぶためのバックパスになり得ている。今回の視察の限りでは、当たり前前ではあるが、ポゼッションを重視するチームがそのバルサの本質に迫れていないと感じた。

第二に、狭い局面にこだわった攻撃、特に中央突破にこだわった攻撃の多さである。確かに、中央（内）から突破できるのに、わざわざゴールに近づかない外を使用するのは無駄である。FWが中央でスルーパスを要求しており、パスが成功すればGKとの1対1の局面を作れる状況で、アウトサイドへの展開を選択するのは、はっきり状況判断の誤りである。内を攻める意識があるから外が空く、というのも正論であり、相手ゴールに対して正対し続けられない選手（横を向いてばかりいる選手）に良い選手はいない。横パスを選択するにしても、なるべく相手ゴールに正対したボディ・シェイプで横パスをした方が味方にとって有利であることを良い選手は体感的に知っている。相手のディフェンスに的を絞らせないためである³。その点、(4)市立浦和のMFは横を向きすぎであり、前をしっかりと

³ 壁パス（ワンツーパス）をするにしても、「壁」になる選手の体の向きが壁そのものになったら、パス成功率は落ちる。一旦（ハッターリでも）前を向く（そぶりをする）ことで壁

向けない余裕のなさが、相手の寄せを招き、本当に余裕がなくなる悪循環を生んでいた。また、上述の良いボディ・シェイプの応用として、意図的に外側を向いて相手を釣り、中央にスルーパスを通すプレーも考えられる。富山第一の 2nd ストライカー⑩が 3 回戦市立浦和戦で見せた（魅せた）華麗なスルーパスは、彼の非凡なサッカーセンスを表すに余りあるプレーであった⁴。

しかし、中央を固める相手に対して、主義を通すとばかりに中央突破にこだわる戦いは「やり過ぎ」であった。特に(1)國學院久我山に顕著であった。確かに久我山の選手も、ボールをワイドに展開して相手の薄いところを突く、または相手の横幅を広げさせギャップを作る意識は垣間見られた。しかし、「外」を縦方向に攻略しても、結局ドリブル・パスで、「外」から「内」へもう一度攻略し直すようでは、相手に中央を固める時間を与え、攻めあぐみの原因となっていた。裏へのダイレクトなパスや、早いタイミングでのクロスを活用を増やし、本当の意味で変幻自在の攻撃、相手に守備の隙を与えない攻撃を目指すべきと感じた⁵。

さて、視察したポゼッション型のチームには上記二つの課題があったと述べてきたが、その課題をクリアしているチームが一つあった。山形県代表と戦った東福岡である。東福岡の選手は、(3)(5)の戦いを通じて、ボールを前に運ぶチャンス、前を向くチャンスを一度たりとも逃さなかった。全員が相手をよく観て何が最善のプレーか、しっかり判断できていた、と言っても良い。また、裏への抜けだし（飛び出し）と足元で受けるプレーのバランスが良く、相手ディフェンスの綻びを作り出す（綻びを見逃さない）攻撃は見事であった。(3)にて、アバウトなクリアボールにも予測し鋭い反応で抜け出したストライカー⑨の 1 点目や、同じく⑨が絶妙なウェーブで米沢中央 CDF との距離を空けスルーパスを呼び込んで決めた何点目だったかは、どんな形からでも得点が可能である（攻撃が変幻自在である）と感じさせるものがあり、さすがプレミアリーグ WEST で優勝争いをしたチームと驚かされた。

しかし、その東福岡も、日章学園の堅守を崩せず PK 合戦で敗れることとなった。何が足りなかったのか。結果論であるが、引いた相手を崩す得点力が足りなかったと言うしかない。上述の通り、ストライカー⑨は素晴らしく、プロ選手に必ずやなるだろうと思われるが、それでも言えるのは FW が目立つチームというよりは、中盤の構成が「売り」のチームであったということ。FW 力というより MF 力に秀でたチームカラーであったと言い換えても良い。選手権を今年 5 試合観て、改めて、《選手権は FW と GK/CDF が良くないと勝てない》ことを感じた。これだけ言うと当たり前のようだが、こう付け加えておく。《ただし、良い MF の存在は必ずしも必須ではない》と。中盤の攻防に勝利しても、サッ

パス成功率も上がる。そうした体の使い方が定着している選手、または、そうした駆け引きを考えることのできる選手が良い選手だと思う。

⁴ 結局、ストライカー⑨が冷静に GK との 1 対 1 を決め、追加点となった。

⁵ ただこの点は、サッカースタイル（各チームの主義/スタイル）に関わることなので、よそ者が言い過ぎてはいけないのだが。

カーはやはりゴールを守り、ゴールを奪うことを競う競技。(1)~(5)の勝利チームには、いずれも、①単独でもゴールに迫ることのできるFW、または、ボールキープ力に優れ孤立気味の前線で時間を作ることのできる素晴らしいFWと、②走力・当たりの強さ・高さ・読みいずれにも秀でた素晴らしいCDF⁶、③安定感と反応の鋭さで守護神として君臨しPKにも強いGKを備えていた。特に③は必須中の必須事項であり、劣勢をはねのけた(1)(2)(5)ではGKが勝利の第一の立役者であったと言って過言ではない⁷。もちろん、良いMFが不要であるわけではないが、アタッキング・サード(相手ゴール前)とディフェンシブ・サード(味方ゴール前)の強いチームが勝つ、というサッカーの本質上当たり前のことが確認された選手権であった、とまとめたい。

後に優勝することとなった富山第一について一言。富山第一の優勝で印象深いのは、何といっても決勝戦での粘りである。「2点差は怖い」とは言うものの、残り10分で2点差であれば、勝利/敗北は近い。それを跳ね返す不屈のメンタリティは当然に称賛に値する。視察者(私)が偶然(4)を観戦した経験から、一つエピソードを皆さんに。前半圧倒的な攻撃力で3得点し、セイフティ・リードを確保したかと思われた富山第一であったが、前半終了間際、相手選手の個の力でネットを揺らされ、3対1で後半を迎えた。後半は、高さで勝る市立浦和が徹底してディフェンス裏に長いボールを送り込み、富山第一を防戦一方に追い込む。前後半で攻守がガラリと変わり、富山第一の力を過大評価していたことに気づく後半。市立浦和が攻勢の中から加点し、押せ押せムード。しかし、時間が足りず、3対2で富山第一が辛勝を収めた。あの後半の苦しい戦いを演じた富山第一が結果的にその後優勝し、視察者は驚いたが、あの後半の戦いがあったからこそ決勝戦の粘りにつながった気がしてならない。市立浦和の諦めないメンタリティに、(プレミアリーグに参加しており格上の)富山第一は凄味を感じたに違いない。そして、点差が開いても諦めなければ何かが起こることを(対戦相手として)実感したに違いない。富山第一の決勝戦の戦いは市立浦和のおかげである、などとまとめるのは、いささか感傷的だろうか。

最後に、山形代表の米沢中央について一言。正直、あらゆる点で東福岡に力を見せつけられ、持ち味を發揮できないまま大会をあとにすることとなった。5-4-1の守備的布陣からスタートしたのは彼我の力の差を考慮するにいたしかたないにしても、後半途中でツートップにし前線の起点を増やしてから逆に守備も安定したのは皮肉であった。中心選手の故障という苦しい事情もあっただろうが、「米沢中央の時間」をもう少し増やしたかったというのが正直な感想である。FWが上述のようなボールキープ力に優れ孤立気味の前線で時

⁶ このCDFの特徴の中に、テクニック・展開力等、ボール・ポゼッションに利する特徴が含まれていないのがポイントである。

⁷ (2)は佐賀東が劣勢だったわけではなく五分五分だったが、ボール・ポゼッション率では東海学園に分がある戦いであった。

間を作ることのできるタイプの選手ではなく、前線で献身的にディフェンスのできる走力ある選手が起用されたことも、「米沢中央の時間」が少なくなったことの原因であろう。しかし、これらは結果論である。ここでは、相手の全国大会でもスーパーなレベルのFW⑨とのマッチアップでたびたび苦境に立たされたが、全国レベルのプレーをしていたと評価できるキャプテンのCDF③を褒めるにとどめよう。

本当に最後に一言。ここ最近、山形県代表は一回戦敗退が続いている。山形県を勝ち抜いても、全国で通用する選手・チームにならないのであれば仕方がないことを痛感させられ続けている。「山形を勝ち抜けば全国が見える」理想から程遠い現状ではあるが、諦めない不屈のメンタリティを持ち続けねばならない・・・そのことを選手権出場選手から教えられた。